阪神・淡路大震災を経験して医療職を目指すも、
大学卒業後は一般企業に就職、その後、看護師免許を取得、
途上国の実情にあった人材育成での貢献を目指す看護師

ふかたに　かりん
深谷　果林

国際医療協力局
人材開発部 研修課
看護師

★略　歴

2003　大阪外国語大学外国語学部国際文化学科比較文化専攻（フランス語）卒業
　　三井住友銀リース株式会社 入社
2006　国立病院機構 大阪医療センター附属看護学校看護学科 入学
2009　国立国際医療センター（現・国立国際医療研究センター）個室病棟 入職
2015　国際医療協力局 入局

★現在の主な担当業務

《対外業務》
・JICA一次及び二次レベル医療施設従事者のための卒後研修強化プロジェクト/国内担当
・JICA看護サービス人材育成プロジェクト/本邦研修担当
・神奈川県立よこはま看護専門学校「国際看護」授業担当

《局内業務》
・病院看護部研修「国際看護」担当
・低･中所得国の保健医療分野におけるコンピテンシーに基づく教育のインパクト（効果）評価研究 研究協力者
・低･中所得国の保健医療分野における卒後継続教育のインパクト（効果）評価研究 研究協力者
・保健システムチーム

――――深谷さんが、看護師を目指したきっかけを教えて下さい。

中学生の時、阪神・淡路大震災を経験し、災害時に医療職として救助に携われる人になりたいと思いました。その後、メディアなどの情報を通して、海外では、災害時でなくとも普段の生活の中で、日本のように適切な医療を受けることができない人たちがいる、そのために多くの人たちが死に至っているという事実を知りました。高校生の時には、遠い将来、海外で医療職として活動できる人になりたいと思い描いていました。そのことは、さまざまな環境に恵まれている者としての責任ではないかと、真剣に考えていました。
のちに、大学時代に出会ったスワヒリ語専攻の先輩が、「アフリカを見れば世界が分かる」と言った言葉が、私自身の中でキーワードとして残りました。そしていつの日か、多くの貧困地域があるアフリカで国際協力に携わりたいと思うようになりました。

――――大学時代のことを教えてください。

海外で医療職として働くという夢を抱きながら、その夢のベースにもなるのではないかと考えて、もともと興味があった世界や日本の言語・文化・哲学思想を学ぶ大学に進学しました。専攻以外にも、さまざまな言語や国・地域を専門とする個性的な教官や友人、先輩と交流できる学際的な学習環境が、多様性のある社会の縮図のようにも思え、とても充実していました。「違いから学ぶ、楽しむ」という私のスタンスが、このとき形成されたように思います。また、教育実習を通して、「相手が分からないことを、いかに分かりやすく伝えるか」「どのように説明すれば興味を持ってもらえるか」を考え、相手の反応を見ながら工夫を重ねる楽しさを学びました。
今思えば、大学時代に形成された私のスタンスやこの経験は、国際医療協力に携わるうえで、とても役に立っていると思います。
そのような中、医療職ではない私が、夢に向けて今できることは何かを考え、大学病院でのボランティア活動（院内ボランティア）や、JICA事業で日本に訪れた外国人研修生のツアーボランティア（語学ボランティア）などに参加しました。院内ボランティアでは、入院患者さんとの対話を通して、さまざまな人生観に触れたことは貴重な経験で、医療職を目指す者として、「人を看ること」の意味について、自分自身に問い続けた日々でもありました。

――――大学を卒業してから一度、企業に就職していますが…。

私の大学時代は「就職氷河期」と呼ばれ、就職活動はとても努力のいるものでした。海外で医療職として働く夢は諦めていませんでしたが、「日本の企業」で働くことで、経済活動の一員になることも勉強になるのではないかと思っていました。幸運にも希望した会社に採用され、営業アシスタントとして、電話・来客対応、文書作成と確認作業、案件の進捗管理などに従事しました。業務を通じて、自身が携わった書類の一言一句の重みと責任や、予定通りに仕事を進めるための管理能力が問われることを学びました。この経験は、今も、マニュアル・文書作成や複数の事業管理を行う上で重要なスキルとして役に立っています。
そのほか、社内の各部門との連携や、社内報作成も担当し、入社年数が若いなりにも、横断的に仕事をする機会を得られたことで、常に組織における個人の役割について考えをめぐらせていた記憶があります。国際協力はチームで取り組むことが多いので、メンバーシップやマネジメントに関する意識も大切なことだと思います。

――――就職して3年経って看護学校に入学、その後、国立国際医療センターに入職していますね。

夢に近づくために、人生の軌道修正として、看護学校へ進学しました。さまざまな年齢の生徒が在籍していたため、各生徒のバックグラウンドから生まれる多様な看護観があり、とても刺激的でした。
就職は、「海外で医療職」という夢に近づくため、国際医療協力局のある当センターへ就職しました。単科ではない、全科対応の個室病棟へ配属となり、乳幼児から成人期までのあらゆる年齢層と疾患・病期への対応は、幅広い知識と技術、柔軟性と瞬発力が求められ、時に大きなプレッシャーにもなりましたが、常に緊張感をもち、学ぶ姿勢を持ち続けることで、自信につながりました。

看護学校時代、仲間と一緒に

後に担当した病棟内新人看護師教育では、その経験を生かし、各新人看護師の自信につながる教育を目標に、各人の良さと改善が望まれるところをいち早く見つけ出し、「成長を促す道筋を作る・試す・振り返る」作業を繰り返し、個性に合わせた教育を日々考えていました。このことは、大きな責任でもありましたが醍醐味でもあり、国際医療協力局のミッションでもある「人材育成」事業に通ずると思っています。

病棟の先輩や後輩と（個室病棟）

――――病棟勤務の後、国際医療協力局に入職したのですね。

病棟で６年間勤務したのち、国際医療協力局に異動となりました。入局してからは、新しく立ち上がった事業のためのマニュアル、関連文書の作成、セミナーの運営、東南アジア諸国の看護臨床実習にフォーカスした研修事業、JICA課題別研修（アフリカ仏語圏地域母子研修）などに従事しました。

JICA課題別研修「アフリカ仏語圏地域 妊産婦の健康改善」
本邦研修担当

――――今後、国際医療協力局で、どのような仕事をしていきたいですか。

これまで主に、看護職の人材育成事業に携わってきました。今後は、このことを広く発信し、まだ訪れたことのない国や地域の人々と知識や経験を共有しながら､引き続き、その国・地域にあった人材育成に携わっていきたいと思っています。そのためにも､各国の保健医療システム、保健人材の教育制度とそれらに関係する文化、思想、社会制度に関する知識を深めていきたいと思います。

平成28年度厚生労働省医療技術等国際展開推進事業
「カンボジア・ラオス・ミャンマー・バングラデシュにおける看護臨床実習指導能力強化」
事業担当

日本国際保健医療学会でポスター発表

――――最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

国際医療協力の分野は、医療分野だけではなく、いろいろな分野が一緒になって成り立っていると思います。そのため、さまざまな経験やバックグラウンドを持つ人たちが、それぞれの専門性や強みを発揮しながら、創造していくことに意義と楽しさがあると思います。
また、海外で働く、海外の人たちと働くということは、その国のファンになることから始まるのではないかと思います。ファンになるには、自分の国のことを語れることも重要と感じています。自分の専門分野はもちろんのこと、日々、日常生活の中で多岐にわたり、興味や関心を持つことも大切なのではないかと思います。

――――ありがとうございました。